

手筒花火発祥之地



# 吉田神社

## 吉田神社御由緒

御祭神 素盞鳴尊

創建については諸説ありますが、旧社家の文書には天治元年（一一二四）当地で疫病が流行した際、牛頭天王を勧請し疫病退散を祈願したのに始まるとあります。源頼朝の崇敬殊に篤かったとされ、治承二年（一一七八）頼朝雲谷普門寺に在宿の折、御祈願の為名代鈴木新十郎元利をして参拝せしめ、後文治二年（一一八六）石田次郎為久また代参とあり、其の時二日市に天王社を建立したとあります。

牧野古白の今橋城（吉田城）築城後は御城内天王社・牛頭天王社、天保六年に正一位の神階を賜った後は正一位吉田天王社と称しました。今川義元酒井忠次池田輝政又、徳川幕府成立後も歴代の吉田城主により社殿の造営や修補がなされ、鳥居や手水盤等、同じく城主の寄付にかかるものも多く残ります。明治二年吉田神社と改称、明治四年郷社、大正十一年には縣社に昇格せられました。

戦後社格は廃止されましたが、現在も八ヶ町の氏神として、又手筒花火発祥の神社として崇敬されております。





## 影降石

延宝元年（六七三）に、吉田城主小笠原長矩が鳥居を建立した際、地中深くから発見されたとき、以後影向石として大切にされたと伝われます。また天降石と呼び名もあつたようです。三河国名所図絵には「鳥居より本社の方十歩許にあり。実に奇石にして諸人愛弄すへき面影あり。いつの頃にや空かき曇りて霹靂雨雹と共に天より降しかば影降石と号す」と記されています。



り。実に奇石にして諸人愛弄すへき面影あり。いつの頃にや空かき曇りて霹靂雨雹と共に天より降しかば影降石と号す」と記されています。

## 石鳥居と扁額

石鳥居は延享三年（一七四六）吉田城主松平資訓の建立とされ、鳥居の扁額は明治三年に吉田藩最後の藩主大河内信古により寄進されたものです。「正一位吉田神社」其字信古自ら書する所です。



## 手水舎石盥盤

正徳六（一七一六）城主松平信高寄進  
正徳六丙申六月  
三州吉田城主  
松平氏源信高



# 金柑丸稲荷社と城守護稲荷社

## 御祭神

宇迦之魂命

永正二年（一五〇五）牧野古白が今橋城を築いた当時の本丸であつたとされ、後の吉田城本丸の東側の細長い地形を金柑丸といいます。

社伝には「金柑丸稲荷社は古白今橋城を築くの日勧請する所にして云々」「御城内鎮守稲荷大明神御社之事 御当城内鎮守にて御丸丑寅に御鎮座鬼門之守護之神社」とあり、正徳四年（一七一四）吉田城主松平信高は社殿を修補し、此時正一位の神階を賜るとあります。

明治十一年大河内信古は吉田城内五ヶ所の稲荷社を金柑丸に合祀し、吉田神社境内に移しました。明治三十九年には日露戦役記念として社殿が造立され、明治四十二年には正徳三年松平信高が城内三之丸に勧請したとされる城守護稲荷社が合祀されました。

歴代の吉田城主は名君として知られる松平信明をはじめ幕府の要職を務めた事から出世・開運の稲荷神として、又、旧城内御丸鬼門守護の神社であることから方除けの神として広く信仰されており、





【各種ご案内】

- ◇ ご祈祷（午前9時～午後4時まで受付）  
ご祈祷は個人や家族、また会社・団体の方から、お申し出に  
応じて随時、ご奉仕を致します。厄除・安産・初宮・七五三・  
車禍い・病氣平癒・合格祈願・家内安全・社運隆昌 他
- ◇ 神前結婚式  
挙式の日取りが決まりましたらお早めにご予約下さい。
- ◇ 出向祭典（予約制）  
ご来社の上、又はお電話にてご予約の一週間前迄にご予約  
下さい。地鎮祭・竣工祭・入居・解体等各種清祓い、神葬祭も  
ご奉仕いたします。



〈公共交通機関をご利用の方〉

豊橋駅より豊鉄市内線（路面電車）札木もしくは市役所前下車徒歩7～8分  
豊橋駅より豊鉄バス（新豊・豊川線）豊橋市役所下車徒歩1分

〈自家用車ご利用の方〉

東名高速道路豊川ICもしくは音羽蒲郡ICより30～40分



# 手筒花火発祥 吉田神社



〒440-0891 愛知県豊橋市関屋町2  
TEL/FAX 0532-52-2553  
<http://toyohashi-yoshida.com/>



御祭神  
伊佐波止美命  
玉柱屋比女命  
宇迦之魂命  
もとは御鞆神社  
と称され明和  
年間に勧請さ  
れたと伝わり  
ます。  
大正七年に末社  
御食社が合祀  
されました。



関屋の百花園は渡辺  
小華が名付けた明治  
の豊橋の名所です  
た。現在の結婚式  
ホールの辺りが小華  
の住居と伝わりま  
す。明治初期の豊橋  
文化人の集う風雅の  
地で豊川の清流に調  
和する自然美の豊  
かな名勝であり、  
玉屋という料亭も  
ありました。明治  
四十三年には豊橋  
ホテル、現在は吉  
田会館が建てられ  
ます。



平成五年に手筒  
花火とその歴史  
を後世に伝える  
為に、氏子や手  
筒花火を愛する  
皆様並びに関係  
諸団体のご厚情  
とご協力により  
建立されました。



# 豊橋祇園祭

豊橋市民の間に夏の風物詩として愛され親しまれてきた吉田神社の例祭、通称「豊橋祇園祭」は、毎年七月第三金曜日より三日間開催されます。七月第三金曜日には神社境内に於て、五穀豊穰、無病息災、家運隆盛を祈念して手筒花火が奉納されます。手筒花火は竹取りより始めて揚げ手自らが作り、火柱が噴き上がる筒を抱え、火の粉を全身に浴びながら放揚します。又、更に大きな筒に火薬を込め、台に据えて放揚する大筒花火や短い筒に火薬を込めて片手で放揚するヨウカン花火などもあります。

翌土曜日は、豊川河畔に於て打上花火が放揚されます。これほどの市街地で打ち上げられる花火は珍しく、スターマインをはじめとする各種仕掛け花火から、氏子自らの手による早打ち等が豊橋の夜空を彩り、数万人の観衆を魅了します。

翌日曜日は愈々本祭りです。献幣使参向のもと、例祭が厳かに斎行され、夕刻より神輿渡御です。源頼朝に扮した男児が神輿と共に騎馬にて進む姿から、頼朝行列とも呼ばれます。先頭は獅子飾鉾、神輿の後に、笹踊り、頼朝、乳母、十騎、最後尾は饅頭配です。神輿を中心に行列をなして御旅所である素盞鳴神社に神幸、神事斎行後、吉田神社へ還幸いたします。



頼朝行列



大筒練込み



神前手筒



打ち上げ花火

## 祭礼日程

毎年7月第3金曜日  
基準日となります。

※前日の木曜日には子供の笹踊りが  
氏子町内を巡ります(午後3時頃)

毎年7月第3金曜日

○午後4時頃

大筒練込(氏子各町より神社)

清祓

○午後6時 宵祭

○午後6時30分頃

神前手筒奉納(拜殿前)

各町大筒・手筒・乱玉煙火

奉納(神社境内)

翌土曜日

○午前9時

新本町素盞鳴神社例祭

○午後6時 前夜祭

打上煙火放揚(豊川河畔)

翌日曜日

○午前10時 例祭

献幣使参向・浦安の舞奉奏

○午後4時30分 神幸祭

神輿渡御(頼朝行列)・笹踊り

神前にて笹踊り、午後5時頃  
神社出発、氏子町内を巡り、  
新本町素盞鳴神社へ、  
再び氏子町内を巡り吉田神社  
へ還幸します。



# 江戸時代の花火

「三河国古老伝」に「永禄元（一五五八）天王祭礼 祀ノ花火ト云事始ル」とあります。社史における花火についての最も古い記録は「慶安四年（一六五一）四月將軍徳川家光薨す 之に因りて六月例祭の日山車十騎及花火等皆之を止め只神幸を奉仕す」というものです。又「花火の種目は流星、建物（立物）、打揚、手筒、大筒、綱火等あり、花火の用ひられしは流星手筒を初めとす 始め山車上に於て之を放つ然れども其大なる者なし 次て建物綱火等用ひらるるも亦然り 建物の巨大となりしは元禄十三年（一七〇〇）にして手筒の雄大となりしは正徳元年（一七一）なり 当時これを大筒といふ 後更に大なる者を製し之を台上に緊縛して以て放つ 然して大筒の名称 之に移る」とあります。手筒については「筒花火は元来両車上に於てのみ之を放ち其大なるものなかりしが元禄中 本町糺屋金兵衛の弟小倉彦兵衛初めて山車以外において大なし（大放し）の略…手筒の内やや大なるもの」を放つ 時に彦兵衛皮羽織を着して之を為すといふ 尋で其翌年に至り上伝馬山名屋与兵衛芹壳屋茂左衛門 薬師世古山三左衛門等之に倣ひ 遂に此年其雄大を致す」とあります。又、建物花火については二基あり、これに火を放てば黒煙渦巻き虚空に上り、火光四方に散乱してその明るいこと真昼の如く、黒煙が消え去ると絵模様が鮮明に現れたと伝わります。元禄十三年に巨大になり、その長さ十三間（約二十三m）、幅三間半（約六m）あったと記録されます。又、綱火は本町の南北両側に懸けられました。江戸時代、祭礼前日の花火は吉田城下、東海道沿い本町で行われ、本町の中央には吉田城主の棧敷が設けられ、笹踊りの到着を合図に様々な花火が放揚されました。吉田城内天王社の祭礼は花火祭として其の名を遠近に知られ、滝沢馬琴は羈旅漫録において「吉田の今日の花火天下第一」と称しております。



吉田神社蔵「旧式祭礼図」より





吉田神社蔵「白式祭礼図」より

## 吉田城内天王社 祭礼

神輿渡御は、天文十六年（一五四七）に今川義元が神輿を寄進している事からその歴史は古く、明治末まで旧暦六月十五日に斎行されました。行列に先立って吉田城内閑屋小路に設けられた城主見物の棧敷の前では、駆馳の式（十騎が南北の馬場を三回駆けるもの）があり、笹踊は踊り返し（城主棧敷前を往復三回）、饅頭配と呼ばれる頼朝の家来は城主に挨拶し饅頭を配り、其々神幸に供奉しました。先頭を進む笠鉾（飾鉾）は氏子町内外の寺院から八本出され、神輿を中心に行列をなして下社であり御旅所である御輿休天王社（今の新本町素盞鳴神社）へ神幸、神事斎行後、城内天王社へ還幸しました。

天王社祭礼は公給（藩の援助）四十二俵、御馬十二疋や馬具馬丁等、吉田藩の厚い保護を受け、氏子町内のみならず藩の武家の祭でもあり、吉田の町全体の祭礼であったともいえます。明治の廃藩による公給廃止や神仏分離の結果、山車や寺院からの笠鉾、駆馳等は廃絶しましたが、獅子飾鉾や頼朝、乳母、十騎等は氏子各町によって引き継がれました。



道祖神、歳時十二の歳の  
前夜、長高の田と赤  
北の節の長衣と赤い赤  
飯子の入った天幕の  
軍師目録もあつた  
ころは、お祭りもまじり  
の、庄上と看して

獅子頭  
堂より白浪  
着用して頭よ

神輿、天文五年申す  
元々の堂所より神輿の  
四面に鏡とくしは、鏡  
の面よ、赤の二神の赤  
りたる、赤の二神の赤  
献して、風流の、お祭り  
具指の、お祭り  
主の置、お祭り



新本町素盞鳴神社蔵「白式祭礼図」より

「三河国吉田名蹤綜録」より

笹踊り